

## 付 上の原 8 号墳付近出土の石器

津布 樂 一 樹

本資料は、松島清氏が昭和61年6月14日、上の原古墳群8号墳付近(宇都宮市大谷町1653・第1図参照)を耕作中に発見したもので、氏の御厚意によりここに発表させていただく次第である。

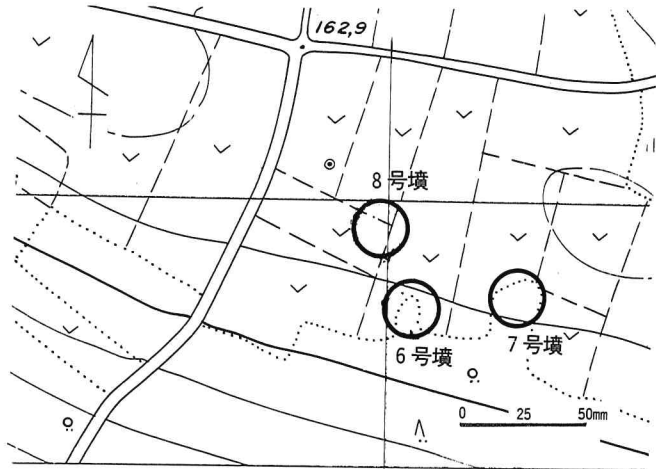
石器は完形品であり、鎌状の形状を呈する。表面の一部に第一次剥離面を残す他は、全面に押圧剥離が施され、つまみ状の作り出しの部分を除く周縁部全てに刃部の形成が行われている。また、周縁部には更に小

さな剥離面が形成されており、刃部の再形成が行われたものと思われる。全長10.0cm、全幅6.4cm、厚さ1.1cmを測る。重量58.3g。石質は赤色で強い光沢をもつ流紋岩であり、只見川流域に産する「赤玉」に類似するが、産地は不明。

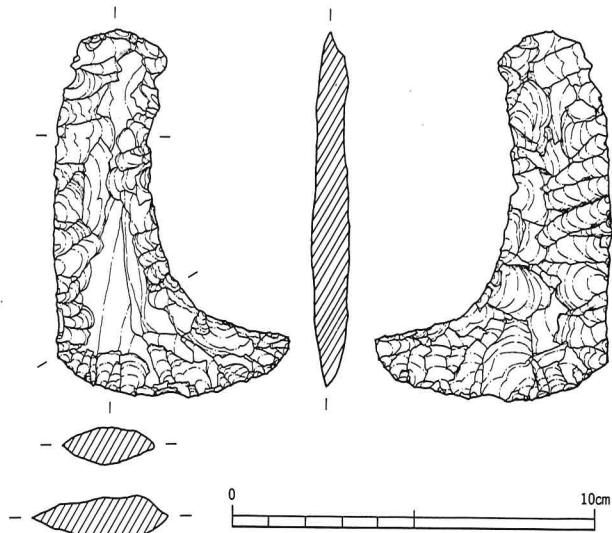
本例は形状、石質ともに現在のところ管見に触れ得ず、用途については不明である。ただし、つまみ状の作り出しをもつことから、石ヒの一種かと思われる。

なお、帰属時期は、発見地付近に前期末から中期初頭の土器の散布がみられることから、概ねこの時期の所産と考えられる。

最後になりましたが、小稿をまとめるにあたり適切な御指導を下さった栃木県立博物館、上野修一氏に深く御礼申し上げます。



第1図 石器出土位置



第2図 石器実測図